

ニューヨークの美術紀行

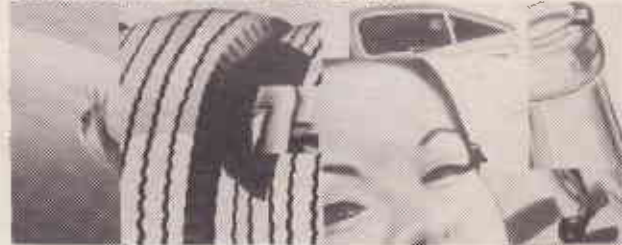
翁長 直樹

86年夏、ニューヨークを拠点にして約3週間、東海岸の主要都市にある美術館を見て回った。3年前の薄れゆく記憶をたよりに、ニューヨークの美術状況をレポートしてみたい。

ニューヨークに着いたのは7月28日午後4時半(現地時間)であった。JFKケネディ空港からクーラーのない固いシートのエレベーターに揺られて、マンハッタンの8thアベニューの岡崎乾二郎宅へ向う。岡崎氏はアジア財団の奨学資金を得て、一年間ニューヨークに滞在して美術の勉強中。東京生まれの現代美術の新進の若手彫刻家で、奥さんと二人でマンション住まい。氏のマンションで荷をほどくと、さっそく夜のマンハッタン見物。地下鉄で1ドルのコイン(トークンと言う)を買って、初のニューヨーク地下鉄体験をする。とりあえず60ストリートまで行き、そこからバスに乗り換えて5番街をバスの中から見物。途中かなり大きな本屋があるので聞いてみると図書館だと言う。メインストリートのすぐ側にあつて、しかも夜遅くまで開いている公共の施設があるのは、さすがにニューヨークであると感心する。マッシュ市長が図書館に力を入れるというのは聞いていたが、わか沖繩の貧弱なるしかも管理的な図書館のあり方を考えて嘆息。

翌朝はさっそくセントラルパークを横切って、メトロポリタン美術館へ。メトロポリタン美術館は5番街のセントラルパーク沿いにあつて、その規模は収蔵品3百万点を越える世界有数の美術館と聞いていたが、その異様にはやはり驚嘆する。先程の図書館と同様メインストリートに面していて、しかも半径1マイル程に数多くの美術館やギャラリーが点在している。銀座や国際通りに美術館があるようなもので、誰のための施設か、その理念や方針が建物の配置を見れば即わかる

うというもの。玄関を入ってすぐに巨大なロビーがあり、その左側のギリシャ、ローマ美術から見ていく。キュクラデス島のかなり省略され、単純化されたふくよかな彫刻が古代地中海の氏族について思い起こさせ、初期アルカイッククロス像(男子青年像)にも妙な感動(ギリシャ人の第一歩という歴史的な思い)を覚える。約2時間近くかけてギリシャ、ローマを見た後、二階に上がりヨーロッパ絵画を見ていく。12世紀から19世紀までのヨーロッパ絵画が約3千点収蔵されており、凄まじい量の作品が無数の部屋に展示されている。マネエリスムの画家ブロンズーノの「青年の肖像」の本物を初めて目にする。気づくことは展示の仕方が実におかりやすく、しかも明るい



ホイットニー美術館のローゼンクイスト作品。

ことである。フラッシュなしで写真が割りと良く撮れる。ヨーロッパ絵画だけで約2時間かけて見た後昼食。美術館のレストランとは思えない豪華さ、と言ってもアメリカの美術館のカフェテリアやレストランはどこも素晴らしく忘れがたいが、

昼食の後見残した19世紀絵画を鑑賞。つくづく思ったことはヨーロッパ絵画の絶えざる革新と論理性である。それは歴史の連続から生まれる伝統であろう。その圧倒的パワーは感性よりも論理で迫ってくる。その時代々の様式の中で数多くの同系列の作家の中で美術史に残ってくるのはコンセプトのはっきりしている作家であり、それさえはっきりしていれば出来上りの完成度はこの次である。こ

のことは2日後の近代美術館を見に行った時、はっきりと確信したことである。

メトロポリタンを2日かけて見た後近代美術館へ。近代美術館はMOMAと言う愛称で呼ばれていてメトロポリタンからダウンタウンへ少し降りて5番街を右に入ったところにごく普通のビルと同様に建っている。地下2階から5階までが美術館で上がマンションといういかにもニューヨークらしい思い切った造りで、84年にこのような大改装をしたらしいMOMAではちょうどジャスパージョーンズの版画の回顧展とウィーン展をしていた。ジョーンズはアメリカではもう古典的な作家であり、サザビーズのセリでは凄まじい高価な値がつくとのこと。版画はほとんどがリトグラフで例の筆の規

則的なタッチの繰り返しの作品がほとんどで占められていた。組み版画が多く右と左でコンセプトを違い組み合わせることによって生まれる効果を考えている。モノトーンより色を使っている版の方が人気があつて僕もそちらの方が出来が良いと思つた。

画集でお馴染みのマチスの「ダンス」が部屋の壁一杯にかかり、ポロックの「ワン」がこの国でのポロック神話を物語るかのように、特に位置を与えられて展示されている。

近代美術館について、その魅力はいくら語っても語り尽さないが紙数も迫ってきたので次回で詳細に述べてみたいと思う。

(おなが なおき=高校美術教諭)

* 額縁の専門店 *

合資会社 前田額装商会

〒900 沖縄県松尾2-7-29 ☎(0988)67-4811 FAX(0988)61-0367



アートライフは、OCクレジットで。

沖縄信販

〒900 那覇市松山2-3-10 ☎(0988)61-1123代

沖縄で絵画すること

〔司会〕本日は、お忙しいところお集まり頂いて有難うございます。沖縄での絵画活動について座談会を進めてまいりますので、宜しくどうぞ。まずは皆さんの表現の根源みたいなものを聞かせて下さい。

〔渡名喜〕僕は芸術の特権性というか、巷で言う絵描きから、いつも逃げて来たという感じがする。それに対する戦いの姿勢というか、どこに降りていくかという形で自分の美術が始まったんです。それは、絵画という形式と表現とを一体化させるというか、相互関係を作ることだと思う。相変わらず暗中模索といったとこだけど、もっと現実にマッチした別の表現が欲しい感じがするんだ。今、中央を乗り越えた形での地方性というか、別の新しい芸術が起りつつあるという感じがするな。

〔司会〕伊江さんは、いかがですか。

〔伊江〕僕は3000年前に遡りたいんだけど…。それは中国の殷周時代のことなわけです。絵か文字か、または絵文字かという時代なんですね。僕はそれが自分自身の原点だと思っています。ものを○とか△とか□などで表現すること。例えば、鹿などが描かれていたら、ああこれはシカなんだと考えたり、あるいは文字に見えたり、絵に見えたりするわけですね。楽しいから描いているという状況、その時が僕なんかすごく感動する。ものを作る喜びというのは、そういうところにあるわけです。その喜びで僕は仕事をしている。

〔司会〕金城(満)さんは、どうですか？

〔金城(満)〕今、伊江さんが視覚的なお話をなさったわけだけど、僕の場合そうではなくて空気感なんですよね。その空気感がきしむ時に、絵を描く素材があるわけです。例えばオートバイに乗って走っていたりすると、その感じというのはとても粗い粒子の世界なんです。ところが、絵画するというのは、もっと細かい粒子まるで摺り鉢で潰した状態に近いわ

けです。日常が粗い粒子だとすると、絵を描く状況というのはもっと細かい粒子を出して見るということです。時には、ノイズがピカッと火花を散らしたりする。それをどのように表現しようかと思った時に、初めて視覚の領域が入ってくるんだ。だから、僕の場合視覚から入るというのではなく、粗い粒子の中にある細かい粒子のノイズから起こるデリケートな部分を感じた時、創作に入れるわけです。〔司会〕金城(明)さんは、ノイズという捉え方をすると、沖縄の市民生活のノイズを画面一杯に散りばめているような感じがするんですけど。

〔金城(明)〕僕の感性は頭から流れるのではなく、じかに目から手へということなんです。僕の仕事は、在来種を採集しているような気がします。植物に限ら

ころをとってもそういうことが言える。しかし、それをやるには明一のカーラ家じゃ困るんだ。もっと別のカーラ家があるんだ。

〔伊江〕でも、ものを作るというのは、やっぱりその緊張感が、ものすごく必要なんだね。沖縄には緊張感というものが、あまりないんだ。人からいろいろ言われてみないと、恐怖感も緊張感も出てきやしない。しかし、その緊張感のある時こそ“神”を感じるんだね。「神は生きている」って思うんだ。神は愛なんだってね。金城(明)さんのことと言えば、僕はカーラ一つで世界に勝てると思う。まだまだ、赤ガーラの仕事は残されているし、素材なんかを考えると、沖縄はパラダイスなんだ。

〔渡名喜〕確かにね。その方向性をもち



左から金城満、伊江隆人、渡名喜元俊、金城明一の各氏。

ず建物、風景などもそうなんです。外來種に追いやられている状況があると思います。その辺りを、拾い集めているのが僕のやっていることです。

〔渡名喜〕大嶺政寛氏が描かなかった沖縄の素晴らしさは、もっと沢山あるはずなんだ。例えば、カーラ家の中で生きていく人間の闇、物理的な光が届かないと

ながら何故、絵画を作らなければならぬかということ、きちんと押さえていないと日本、世界で通用する作家にはなれないという気がするね。沖縄には素材が豊富だといって、いくら沖縄の葉っぱをコラージュしてみても、頭の中が旧来の近代絵画の考え方では絶対にダメなんだ。

有限会社
画材専門 **タナカ**

代表取締役 田中興八

〒900 那覇市権志2丁目17の6番地 TEL (0988) 61-7410 沖映通りダイナハ向い

国家試験合格者輩出-No.1の総合コンピュータ専門学校

専修学校 **CSCコンピューター学院**

那覇校 900 沖縄県那覇市山下町103-1 電話 (0988) 59-0746
中部校 904 沖縄県沖縄市宇室111-4-10 電話 (09893) 8-1631

伊江 隆人／金城 明一／金城 満／渡名喜 元俊

〔金城(明)〕僕の場合、比較対照としてのヤマトとか世界というのは意識にないんだ。そういうことでは、意固地なまでに自分の絵との関係でしか、自分の絵を進めていけないわけです。自分で自分の絵を意味付けたいわけですから、自分の絵をケナされても、それはそうかとしか言えない。

〔渡名喜〕いや、ケナしているわけではないんだが…。

〔金城(満)〕うーん。僕はこんな感じがするんだけど。カーラとか一つの言葉みたいなものを使って、何をしゃべっていくかということでしょう。つまり、しゃべるものがないと、カーラという言葉がしゃべられても、あるいは使っても仕様ががない。

〔渡名喜〕つまりね、絵画という容器がね。そこでは容器が西洋絵画なんだ。その容器の中でしゃべっちゃ、やっぱりいけないと思うんだ。西洋の中でウチナー口をしゃべっているわけよ。もっとウチナーで、ウチナーの素材で、ウチナー口をしゃべれないかと思うね。

〔金城(満)〕つまりね、しゃべりたいものを何語でしゃべるかということがあるわけですよ。何がしゃべりたいのかということ、日常的に取り込んでやっていくと思う。

〔司会〕ここで「沖繩」という枠を意識的につめてみたいんですが。

〔渡名喜〕自分の孤独的な世界では、全てのヒエラルキーがないはずなのに、現実社会では絵画のとんでもないヒエラルキーがあるわけです。沖繩では「沖展」を頂点にして、ものすごいヒエラルキーがあるんだ。その中でシコシコやらなければならない自分つまらないし、何とか賞の候補になったとか、獲ったとかとてもつまらないわけです。芸術は本来、価値体系をぶち壊していく作業だと思うし、そういう作品は本当は高く売れるんだと思うけど、沖繩の貧しさゆえに高く売

れないということがある。沖繩の貧しさと勝負していたら、仕様がなくてという感じもする。そういうことで、沖繩で芸術活動していて「ヌーナイガ?」という気持ちは、とても強いね。

〔伊江〕描けていければ、いいと思うんだけどね…。

〔司会〕沖繩でやっていくという方法論については、どうでしょうか?

〔渡名喜〕それは、在野の公募展あるいは現代絵画展で展賞を貰って伸びていく方法もあると思うけれども、沖展で某賞を獲ったからといって、経済的なバックアップがあるわけじゃないんだ。基本的



大嶺政寛「八重山風景」

には、沖繩で美術状況が熟する必要があると思う。沖繩の画家は、もっと別の方法を考えないといけない。前衛を求める世界が崩壊しつつあるというのは、我々にとって救いだと思うし、その辺でローカル性がグローバルな世界に繋がっていくんだと思う。ビーンズ・バンクという言葉があるらしいけど、原種の大事さが今盛んに言われている。我々は原種人だし、太古の地球(琉球)がグツグツと煮えだぎっている。そういう意味では、戦っている状況ができてきている。

〔司会〕そのことは世界の経済とか文化とかを超えて、個々のオリジナリティーで勝負できる時代がやってきたということでしょうか。

〔渡名喜〕オリジナリティーを超えるというか、そういう認識がポストモダンあるいは世紀末だと思う。それだけ、我々が世界に羽ばたける時代が来たんだと

いう気がする。

〔金城(満)〕クワタァ、クワタァーと、その時代の音が聞こえる感じがする。

〔伊江〕そうだ、そうだよ。皆で門を叩こう!でも、皆沖繩から出てどこでもいからぶつかってみればいいと思う。そこから、きっと何か生まれるんだと思う。この狭い四畳半の沖繩でもものを作って、わからないことが確かにあるんだ。

〔司会〕だいぶ、時間も無くなりつつありますが、ありきたりですけど最後に今後の抱負を聞かせて下さい。

〔金城(明)〕最後の方で出たオリジナリティーということなんですけど、それを自分達でしっかり見て、意味付けしていくことが大事だと思います。沖繩の人は外ばかり向いて、なかなかそのオリジナリティーに目を向けて、表に出す作業をしていないんだと思います。

〔渡名喜〕僕は世界に羽ばたくことしかないですね。世界というのは、沖繩も世界だし、世界も世界ということですよ。世界に渡名喜元俊というアーティストがいたんだということをね、残したいですね。それが作品に望むことだし、夢ですね。それがないと絵は描けませんよ。

〔伊江〕クリアーする。この一語に尽きるね。僕は。つまり、一つの作品が出来たら、それをクリアーして次の作品に挑む。常に自分に挑戦していきたいということです。

〔金城(満)〕どうして絵を描きたくなる自分が存在しているのかということ。それが一番知りたい。その時、人も自分も好きになれると思う。

〔司会〕いずれにしても、精一杯のエネルギーを費やして作品に向かって頂ければと思います。沖繩の美術はまだ始まったばかり、アーティストがアーティストとして本格的な仕事をして行くというのは、これからだと思います。どうぞ頑張って下さい。本日は、どうもありがとうございました。(了)



Kentucky Fried Chicken.

株式会社 リウエン商事
代表取締役社長 宮城 義明

〒900 沖縄県那覇市奥武山町26番地48 TEL (0988) 58-6468

“専門画材の店”



CULTURE PLAZA

株式会社 **みつや書店**

〒902 沖縄県那覇市壺屋1-1-3 ☎ (0988) 63-1650

ギャラリー情報

■伊江 隆人展/9月12日~17日

「スリサーサァ、スリ、ヒャァ、スリサーサァ」の伊江さん独特のリズムと気合いが画面から聞こえて来るようだ。昨夏のニューヨークでのパフォーマンス以来、画面が大きく変化している。クロスオーバーな、味クーターな線、自在に画面を走る墨が気持ち良い。40日間のニューヨーク滞在の成果が見られそうだ。

■金城 明一展/10月3日~8日

ここ2、3年金城氏は島尻あたりの生活風景を題材にした作品が続いている。これ以上でもなければ、これ以下でもないというリベラルな視座は一貫して通している。島尻の地にマーヒラキーした画家が、今回どのような作品を発表するか楽しみだ。

■ゴヤ・フリオ彫刻展/11月11日

~19日

昨年度開かれた第2回ロダン大賞展でのゴヤ氏の受賞は、県内の彫刻界のみならず美術界全体に実のある希望のもてるニュースとして届いた。受賞した作品「シ



ンフォニア」(3.8×3.8×8.8m)は現在、美ヶ原の野外に永久展示になっている。今回は受賞のノリを発揮した作品群になるでしょう。乞うご期待。

ギャラリーウーマン

パリの五日間

去った5月のG・Wにパリに行ってきました。パリ市内に住む沖縄出身の彫刻

家・幸地学さん夫妻の案内で、美術館や博物館そして画廊の日常を見ることが出来ました。やはり、フランスは歴史が深い事を感じます。絵画にも彫刻にも、すぐ手が届きます。生活の中に本物があるのです。いつでも誰でも、偉大な芸術家達の作品に触れる事ができるのです。幸地さんは「美術館に来ると勇気が湧いてくる」と言っていました。人々は皆、かつて人間の歴史や表現の中に、自分の生き方を確認しているのかも知れません。羨ましい限りです。偉大な芸術家と呼ばれた画家達の作品を身近に感じていると「沖縄にも素晴らしい画家がいる！」と私自身強く実感してしまいました。それと同時に沖縄の歴史や文化を学び、認識



「ボンビドウにて」 瀬底貴子

しなければと思いました。幸地学さん専属の画廊オーナーであるクロードさんにも、パリの画廊を案内して頂きました。パリもギャラリーにより、カラーが違います。日本人好みの装飾的具象画を扱ったギャラリーもあれば、現代絵画を扱ったギャラリー等、様々です。パリの画廊は偉大な芸術家の作品を数多くコレクションして運営をしているので、若い卵達は大変です。画廊で扱って貰えぬ限り、世間に認められないので必死に自分の作品を描き、売り込むのです。ある画廊で、こんな事がありました。日本から画廊が来ていると聞いた画家は、電話で自分の作品の値段を上げたいと言ってきました。それだけ日本人は金持ちで、絵を高く買い取ってくれると言うのです。日本人の絵画の見方、買い方には疑問をもたざるを得ません。それから考えさせられた事は、日本の価格の決め方にサイズを基準にしていることです。例えば、A作家の評価価格単位10万円単位と決められると、そのA作家が描いた作品は全て号単価10万円と計算されてしまうのです。この方法は日本だけだと思います。クロードさんは常に作品のサイズや出来具合により価格が異なると教えてくれました。同感です。今、私は営業担当の一人ですが、今回のパリの旅で世界の美術界がより近くなったと感じています。沖縄という

小さな島国から世界に通用する画家を生み出していける画廊として、仕事に期待と自信をもっていきたいと思います。もちろん画家とコレクターと画廊の理解と協力があってこそですが、それもそう遠くはないと思います。(瀬底 貴子)

新人デス!

みなさん、初めまして。私は今年の3月から、画廊沖縄に勤めています新人の玉ナハです。アメリカの大学ではデザインを専攻していたので、国内外のいろんな絵に囲まれて仕事ができる画廊は、私にとってベストな職場です。アメリカの画廊は規模も大きいし、人々のアートへの親しみ方が日本とは比べものになりません。この意味でも、沖縄にも画廊が増えてきたことはとても喜ばしいことです。画廊沖縄のスタッフもパリやニューヨークへと国際的に絵画市場を探索に出て、最新の情報とより良い絵画を見つけ出す事に力を入れています。画廊へ来られるお客様には、絵に詳しい方と初めての方といろいろいらっしゃいますが、絵との出会いにも恋愛型と見合い型があるように思えます。最初から好きでその絵を求めに来られる方は、恋愛型。初めは理解できなくても、時間が経てば経つ程わかり合えるのが見合い型。そのどちらのタイプも、波長の合うパートナーと出会えるのが大切ですね。そこで私達スタッフが仲人役となるわけです。時々、内在する何かを自由に表現できる作家が、うらやましくなったりします。でも、自分と同じものを含む絵と出会った時には、又この上なく感激するものがあります。これからも画廊沖縄は質のいい絵を提供し、貴重な出会いができるようお手伝いしていきます。新米の私ですが、どうぞ宜しくお願い致します。(玉那覇 弘子)

編集デスク

初めて座談会を組んでみた。なかなか話がまとまらない。やはり沖縄でアートを続けていく事の難しさを痛感した。作家個々においてかなりうっ積したものがあつた事を確認するに止まった感がある。今後は、もっと突っ込んだ話を展開していきたい。しかし、これからの沖縄のアート界をリードして行くであろう作家達が、強い表現意欲を示した事は、何よりも心強い。(上)

Adlib 広告制作事務所
アドリヴ
〒901-21 浦添市字勢理客527 ☎0988(77)6535

art
ART GALLERY OKINAWA

絵画(油彩・水彩・版画)の専門店

画廊 沖縄

〒900 沖縄県那覇市泉崎2-2-3 ☎(0988)34-6760